わずか68日だけ存在した幻の城

studio クルワ

日本の城を楽しむ

YouTube かいのすけ歴史

「新府城」 しんぷじょう　山梨県韮崎市中田町 中条字城山

城跡の様子は？

韮崎市郊外の静かな場所。まわりは畑が広がり店も民家もありません。とても静かに見学できる城跡です。無料駐車場は広く空いていますが、たまに観光バスが訪れるとのこと。団体で見学するツアー客の方もいるようです。駐車場に自動販売機があり。トイレは本丸跡にあります。本丸と大手門、搦手門付近は整備が進んでいますが、その他の曲輪は樹木が生い茂る山林。無理に藪の中に入ることはおススメしません。七里岩の高さを見るには一度釜無川付近まで降りる必要あり。車の場合急カーブが連続する道を通ることになるので、運転に多少の注意が必要です。晴れていれば遠く富士山を望むことができます。

見学のポイント

１ 最大の見どころ「大手馬出」

２ 搦手の水堀と出構に注目

３ 時間があれば七里岩の断崖を下から眺める

武田家「最期の城」

山梨県韮崎市。この町で目立つのは七里岩と呼ばれる巨大な崖。ゴツゴツの岩が並ぶ地形がずっと続いているんですね。七里岩は昔富士山より高かった八ヶ岳の頂上が噴火によって吹き飛び、その土砂を川の流れが削ってできたと言われています。戦国時代の終わりごろ、この川に挟まれた細長い台地の上に巨大な城が造られました。その名を新府城と言います。その名の通り、甲斐の新しい中心となるべくこの城は、戦国最強と呼ばれた武田家の最後の当主勝頼によって、最高の技術を用いて築かれました。しかしその力は発揮されることなく、未完成のまま勝頼の手によって焼き払われてしまいます。新府城が地上に姿を見せていたのはわずか６８日。まさに幻の城なのです。

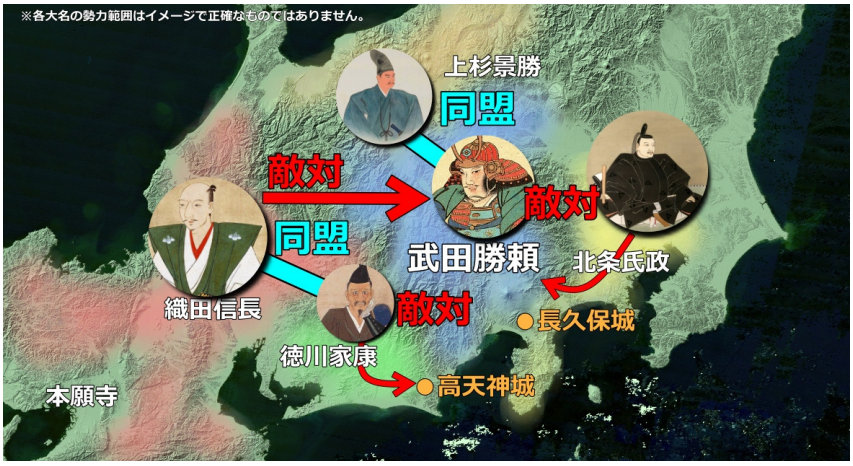
なぜ武田家最大の城、新府城は、完成を待つことなく焼き払われてしまったのでしょうか。また、その後武田勝頼の運命はどのようになったのでしょうか。

左　西側から見る七里岩。八ヶ岳が望めます。右　近くによれば圧巻の高さ。

新府城が築かれた理由

武田勝頼は、三河長篠にて織田・徳川連合軍と戦い大敗。その後、越後上杉氏の後継者争いをきっかけにそれまで同盟していた相模の北条氏とも争うこととなり、周辺国は敵だらけとなってしまいました。これでは戦国最強と呼ばれた武田軍でも領国の守りを固めざるを得ません。一方勝頼と敵対していた織田信長は、大坂の本願寺を降して畿内を制圧。信長の次の狙いは、勝頼が治める甲斐・信濃に向けられるのです。

このような状況の中、勝頼は新府の地に新たな武田の本拠となる城を築き始めます。織田・徳川、そして北条の軍がやがて甲斐に攻め込んでくることとなり、武田家が長く本拠としていた躑躅ヶ崎館では迎え撃つことができない！ということがはっきりしてきたのでしょう。七里岩の断崖に守られた「新府城」は防御に優れ、織田・徳川軍の侵攻に対して素早く対応できる位置でもあります。築城が開始されたのは１５８１年２月。武田家滅亡のわずか１年前のことでした。



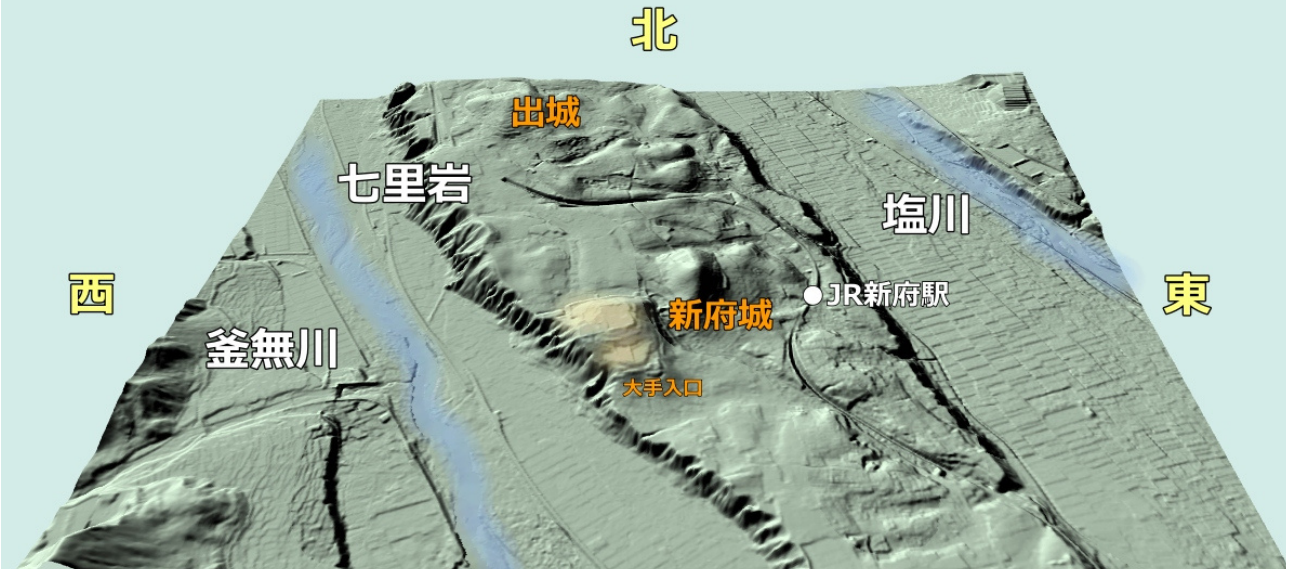
左　新府城が築かれた頃の武田家の様子。まわりは敵ばかり。唯一の味方越後上杉家は内乱を制した景勝が跡を継いだばかりでどのくらい力になってくれるのか・・。右　甲斐大和駅にある武田勝頼の像。

甲斐に攻め寄せる軍勢

新府築城は、勝頼にとって生き残りのためのわずかな希望。しかし周辺の情勢はどんどん悪化していきます。

新府着工から1月後の３月２２日。遠江の高天神城が徳川家康の攻撃を受けて落城。周りに敵を抱える勝頼は、援軍を送ることができませんでした。「武田に味方していても助けにきてくれないのか。」領内に動揺が走り、駿河の武将の中には早くも織田・徳川に内通する動きを見せる者も出てきました。

４月には北条軍が都留郡に侵攻。それまで戦いのなかった甲斐が戦場となりました。９月には駿河長久保城が北条軍によって落城。こうして武田領は少しづつ敵の手によって侵略されていきます。勝頼は新府城の普請を急がせ、工事は昼も夜も続けられたと言います。勝頼が武田の未来をかけて築かせた新府城とは、いったいどのような城だったのでしょうか。



新府城周辺の立体地形図（国土地理院地形図に加筆作成）。中央の色のついた部分が新府城。二つの川に挟まれた細長い台地上の丘陵に築かれているのがわかります。西側の七里岩は絶対に攻め込むことができない崖。

新府城の構造

新府城の西側は高さ１００メートルを超える七里岩の断崖、東側には塩川の流れによる傾斜があり、東西から攻めこむことが難しい地形となっています。城の南側はゆるく台地が下っており、こちら側から攻撃されても城方は高い有利な場所から守ることができます。この南方向に城の正面大手が開かれていました。新府城の唯一の弱点は北側ですが、ここを堀などで断ち切ってしまえば攻めることは大変難しくなります。城の北側には出城が造られていたといわれており（徳川家康によるものか）、徹底的な防御態勢が敷かれていました。また城を囲むように武田家臣団の屋敷が計画され、鉄壁の守りを持つ武田の新首都がこの台地上に出現しようとしていたのです。

大手馬出跡へ！

無料駐車場に車を停めて、まずは南側の大手口から見ていきましょう。城内への最

左　駐車場から本丸への最短ルートはこの鳥居から。一気に新府城跡の最高所まで行くことができます。もちろん後世のもの。階段はひたすらまっすぐ・・。とてもキツイ。
右　無料駐車場。舗装はされていませんが、自動販売機もあります。時にはバスで訪れる団体も。意外と有名？

左　大手馬出の下にある三日月堀。攻撃兵が初めて見る新府城の光景。馬出の脇からここまで降りてこないと後悔します。　右　城内からの丸馬出。手前の土塁の間に門が建つ予定だったのでしょう。

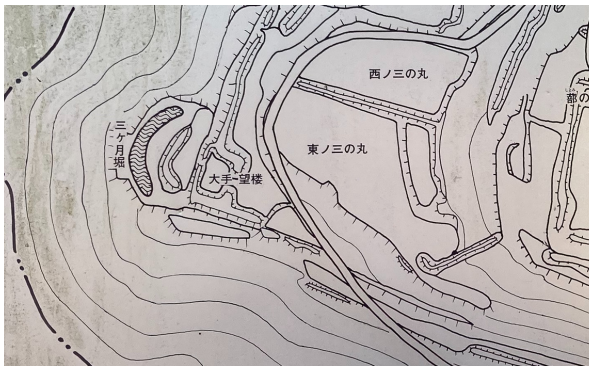
短ルートはこの神社の参道ですが、これは後年になって作られたものなので、今回は無視しましょう。ちなみにとても傾斜がキツく、ここを上ると見学前に相当体力を奪われます。この傾斜をかわすジグザグ道が設けられているので、ゆっくり行きたい方はそちらをお勧めします。

城の南側、大手に向かうには、参道の先にある道を登っていきましょう。しばらく登っていくと左側の景色が気持ちよくスッと開けます。ここが新府城の正面入口大手です。大手は桝形・馬出・三日月堀がセットになった新府城最大の見どころ。キレイな景色が広がっていていろいろ気になりますが、まずは何も見ていないことにして下まで降りてみましょう。

城の南側から坂道を登っていくと、巨大な土の高まりが見えてきます。これが新府城の正面入口「大手馬出」です。高さ・大きさともここから見上げるととんでもない迫力がありますね。城に入るにはこの馬出の両側にあったであろう入口を目指して横移動していくことになります。馬出の下に設けられた三日月型の堀はここを正面突破しようとする敵兵の動きを止めるものです。この堀を乗り越えようと足元に気を取られているうちに、頭上から弓鉄砲による攻撃を食らってしまうというわけです。

なんとか攻撃をかわしながら馬出の端から城内への進入を試みますが、道はかなりの傾斜となっており攻撃側の勢いは削がれることに。そしてその先に待ち構えるのが狭い入口で、もしかするとここには門が建てられる予定だったのかもしれません。怖いのは、これまで通ってきたルートが、すべて馬出から丸見え！ということ。攻撃側は常に城内から攻撃される道を通らなければ城に入れなかったのです。このあたりが城というものの怖さですね。

馬出は半円形の広い空間。ここは上から敵を攻撃する防御拠点で、また反撃の際はいったん兵をまとめるスペースにもなります。丸馬出とこの後に紹介する桝形のセットは武田家が築いた城に多く使われ、こ



左　案内看板にある新府城縄張図。三日月の堀と四角い大手桝形が確認できます。
右　馬出の先にある両袖桝形虎口の土塁。この上に門などの建物の跡は発見されず、新府城が未完成だったことがわかります。

れまで蓄積された技術を新府城の重要な部分に使っていることがわかります。馬出の先に広がるのが両袖桝形虎口。土塁によって囲まれた四角い空間に敵兵を閉じ込め、周りから攻撃する仕掛けです。このあたりの木はバッサリ切られ、その様子がよくわかるようになっていていいですね。ほぼ正方形の桝形の一辺は約３０メートル、ここまで巨大なものはあまりないと思います。新府城が完成していれば複数の門を突破しなければならない構造となっていたはずで、寄せ手は相当な被害を覚悟しなければなりませんでした。今は低くなってしまったであろう土塁と、建物が一切ない現状を見ても、この城の壮大さがわかります（ここには土塁の上に柵か塀があっただけで建物がまだなかったと考えられています）。訪れた人々は、新しい武田の本拠にふさわしい城の出現にさぞかし驚いたのでしょう。

不思議な北側防御

弱点であった城の北側の防御はどのようになっていたのでしょうか。新府城の北側には帯曲輪が設けられ、土塁と水堀が巡っていました。水堀の幅は約７メートル、深さは２メートル以上もあり、その外には幅３０メートルを超える湿地が広がっていました。こんな山の上に水があるの？と思いますが、現在でも水があるのが確認でき、周囲に水が湧く不思議な場所であることがわかります。面白いのは出構（でがまえ）と呼ばれる細長い土塁のようなものが二本堀の中にのびていること。堀に飛び込んだ敵兵を側面からも攻撃できる陣地と考えられています。このように北側も抜かりなく守りが固められていたのです。

一番西側の崖に近い部分は橋として残され、新府城の裏口がありました。大手と同じ桝形構造ですが規模は半分。ここにあった門は燃えて倒壊したことが発掘調査によって明らかになりました。勝頼がこの城に火をかけて退去したのは本当のようですね。

新府城の中心部は四角い形をした本丸。なんとなく躑躅ヶ崎館に似ているような気がします。大手からここへは、もう一つの

左　新府城の裏の入口にあたる搦手乾門跡。土塁の間に二つの門があったと考えられています。発掘調査の結果、ここにあった建物は焼失したことがわかっています。武田勝頼が新府城を引き払うとき、火をかけたのは本当のようですね。
右　北側に残る出構の跡。中央の突出した土塁部分。東西二箇所に確認されています。手前の湿地は水堀の跡。かなり高い場所にあるにもかかわらず水が湧いているのが不思議です。北側から新府城までの高低差はほとんどありません。このあたりが急造の新府城の弱点かも。

馬出を通って二の丸から入るようになっていました。新府城の跡は草が生い茂っている場所が多く、馬出の様子はよくわかりませんでしたが、二の丸への入口はここだったのだろうという跡は見ることができました。二の丸と本丸の間には兵を隠す場所が造られており、新府城が実戦を意識した城であったことがわかります。

現在新府城の本丸跡には神社が建っており、その裏に案内看板があります。ここには勝頼の館が建てられ、池などの優雅な施設があったのでしょう。本丸北側からは八ヶ岳を望むことができ、勝頼が在城中、ここに立って織田軍が攻めてくる信濃の方向を眺めることもあったのかもしれませんね。絶好の妄想ポイントでもあります。

完成する新府城だが・・・

新府城の土塁や堀の普請は9月に終わり、巨大城郭の基礎となる部分が地上に姿を現しました。塀や櫓が建てられれば城は完成となります。さらに工事は続けられ、年内に御殿などを使うことができるよ

左　城跡内のあちこちに案内看板が設置され、見学はしやすいです。右　城跡内にある想定復元図。当時は本丸御殿など主要な建物しかなかったと考えられる。

ようになりました。

１２月２４日、武田勝頼は代々の本拠、躑躅ヶ崎館から新府城に移ります。おそらく新府城は、櫓などは無い、未完成の状態だったのでしょう。工事が続く武田家の新しい居城が完成すれば、追い詰められていた武田家臣や領民の気持ちも上向きになっていくかもしれません。武田家にとって新しい時代を開く出来事であったのでしょう。しかし・・勝頼が新府城に入ったのと同じころ、織田信長は家臣に武田攻めの準備を始めるよう促していたのです。

ついに織田軍出陣

翌１５８２年１月。武田領木曽を治めていた木曽義昌の謀反が発覚。勝頼は討伐のため木曽に軍を進めます。一方、義昌は織田に救援を要請。これを受けて２月３日、ついに織田信長は武田討伐の命令を下します。信長の命によって駿河からは徳川軍、飛騨と伊那谷から織田軍が武田領に侵攻。また関東の北条軍も動き、木曽義昌に勝てなかった勝頼は、軍を引くしかありませんでした。

２月１４日、浅間山が噴火。東の空を真っ赤に染める火柱は、武田家が神から見放されたことを示すかのように人々に映ったのでしょう。

２月１７日、伊那の拠点大島城が自落。信長の息子信忠率いる大軍が伊那谷を攻め上ります。

２月２９日、武田一族であった駿河の穴山梅雪が徳川家康に降伏。南から徳川軍が甲斐に侵攻してくることが確実になりました。

３月２日、勝頼の弟仁科盛信が守る高遠城が信忠の攻撃を受け落城。この知らせはすぐに新府の勝頼のもとに届けられました。まだ若い弟盛信が武田の意地を見せ割腹したこと。一方で多くの武田一門が逃げ家を守る将も兵もいなくなっていること。武田家の崩壊が明らかになったこの日、勝頼は様々な思いを巡らせたのでしょう。そして新府城は最後の夜を迎えます。

【景徳院】山梨県甲州市大和町田野３８９

武田勝頼が新府城から逃れ、自刃した地。寺の入口に無料駐車場があり、見学することができます。
左　景徳院山門　上　付近の川沿いにある壁像。勝頼と運命を共にした夫人らをイメージ。下　景徳院内にある甲将殿。言い伝えによればこの下に勝頼一行の遺骸が埋められた。現在はこの建物の裏に勝頼の墓がある。

翌３月３日、勝頼は未完成だった新府城からの退去を決定。新造されたばかりの御殿やまだ整わないわずかな櫓や門は武田兵によって火をかけられ、崩れ落ちていきました。勝頼が入城してからわずか６８日。新府城は地上から姿を消し幻の城となったのです。

わずかな兵を率いて東の山奥に当てのない行軍に向かった勝頼。やがて郡内の小山田氏に行く手を遮られ、一行の進退は窮まることになります。田野の地で屋敷を柵で囲み陣所としますが、そこを織田方の滝川一益に知られ取り囲まれます。勝頼の周りにいたのは北条夫人と息子信勝、そして５０人ほどの兵士だけ。もはや逃れられないことを悟った勝頼一行はここで自害。戦国の世に名を馳せた武田家の滅亡は勝頼が新府城を立ち去ってから８日後３月１１日のことでした。

勝頼、田野にて自刃

武田勝頼一行が果てた地、田野。ここに、のちに甲斐の領主となった徳川家康によって勝頼を弔う寺が建てられました。戒名から景徳院と名付けられたその寺には、勝頼と夫人、信勝の墓が残っています。現在みられる墓が建てられるのはのちの時代のこと。江戸時代の文献によれば「勝頼一行の遺骸は主君も家臣も入り乱れた状態で、そのために同じ穴に葬った」ということが伝わっています。その場所はどこかというと現在のお堂（甲将殿）がある場所。勝頼の首は信長のもとに送られますが、きっと魂はここにあるのでしょう。

４月３日、織田信長は新府城の跡を訪れています。その後甲府に入り、わずかな滞在の後、畿内に戻ります。最大の敵を滅ぼした信長の頭の中には、天下統一に向けた次のプランが巡っていたのでしょう。しかしそれから２か月、本能寺の変によって信長も地上から姿を消し、再び混乱の世が訪れるのです。

おすすめルート

駐車場から道路を歩いて大手馬出へ。馬出の下まで降りてその高さを実感すると楽しい。城跡内の道路を歩いて二ノ丸虎口跡へ。土塁開口部が確認できます。本丸で池泉遺構を確認し北側を眺める。その後神社参道を下って北側の出構へ。水堀跡に沿って進むと乾門跡に着きます。城内に入って井戸跡から再び本丸へ。トイレは本丸にあります。大手馬出から富士山が見えます。時間があれば釜無川まで降りて七里岩を下から眺めるとこの地が選ばれた理由がよくわかります。（画像Google）